

# 死をどのように考えてきたのか⑧

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

仏教では、自死に限らず「殺生」は悪い行いとされます。1960年代に中国当局に逮捕され、人民裁判で公衆の面前での鞭打ち刑を言い渡されたラマの高僧が、一瞬にして瞑想によって魂を肉体から引き離れた(死んだ)ことを例外として語るダライ・ラマ14世は、これは特殊である、どんな手段であろうと、殺すことは基本的に悪である、と言いました。

自殺(自死)は常に社会的な問題として人間の傍らにあり続ています。日本では、その数の多さやいじめによる子どもの自死は解決すべき緊急の課題の一つとなっています。

## 自殺対策強化月間(3月)によせて

内閣府は、毎年3月を「自殺対策強化月間」としています。HPでは、「最近の自殺をめぐる厳しい情勢を踏まえ、様々な悩みや問題を抱えた人々に届く『当事者本位』の施策の展開ができるよう、政府全体の意識を改革し、一丸となって自殺対策の緊急的な強化を図るため、自殺総合対策会議において、『いのちを守る自殺対策緊急プラン』を決定し、例年、月別自殺者数の最も多い3月を『自殺対策強化月間』と決めました。」(<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/kyoukagekkan/>)と記しています。

たとえば、ヤフーを開くと、内閣府の「気付いて! アクション! 『こころの黄信号』、見逃していませんか? —あなたの周りに悩んでいる人はいませんか?」がトップページに出て来るという自殺予防キャンペーンが企画されました。これは、「Yahoo! JAPAN PR企画」として、3月25日から31日まで続きました。

「ココロの黄信号」診断テストがイラストつきで紹介され、「静かにふくらむ『ココロの黄信号』に気付くための心理テストです。身近な人にも教えてあげて、一緒にやってみてください。」という呼びかけのあと、「最近イライラしてますか?」、「周りに比べて自分はダメだと思う?」、「ローンなど、借金のことを考えると気が重い?」、「嫌いな先生や友人がいる?」、「最近、肩こりがひどい?」、「疲れているのに眠れないことがある?」、「悩みを相談されるのが苦手?」という8つの質問が続きます。そして、「支え合おうよ! インタビュー」が掲載され、サッカー選手の川澄奈穂美さんやモデルの富永愛さんなどのインタビューや一般公募した「支えられた言葉」が読めました。

このキャンペーンでは、「ココロの黄信号」の段階を、自分も周りも気付くことで、自死を食い止めようとしています。そして、社会全体で支える仕組みをもっと利用してほしいとも思っています。「ゲートキーパー(悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人のこと)になろう!」と呼びかけ、悩む人に気づき、話を聞き、そして支援窓口にも相談する方法を示しています。

このように、国が自死問題に取り組む背景として、日本という国は、年間の自死者が3万人を下回ったとはいえ依然高い水準にあること、20~30歳代では死因のトップになっていること、諸外国と比較すると先進国では突出して自殺死亡率が高いことを挙げています。「17分にひとり」、いのちが失われています。

4月2日、「悩みから2年で自殺 NPO 調査 自営業者が最短」という見出しの記事が掲載されました(「保証人社会を問う」『毎日新聞』2013年4月2日夕刊、表も)。

全体	5.0年
男性	3.8年
女性	8.1年
【職業など】	
自営(起業)	2.0年
自営(事業を継承)	4.5年
正規雇用	4.0年
非正規雇用	6.9年
主婦	8.3年
学生・生徒	3.3年
無職(稼働年齢)	6.9年

NPO法人「自殺対策支援センターライフリンク」が自殺者523人(46都道府県、12年までの5年間に遺族に聞き取り、類型ごとに分析し、「自殺実態白書2013」としてまとめた)について、最初に悩みを抱えてから亡くなるまでの期間(経過期間は中央値。中央値は期間の長さで並べた時に真ん中となる対象者の値)を調べたところ、「自ら起業した自営業者(55人)」が2年と最短で、そのうちの38%(21人)が、他人を連帯保証人にするなど個人保証の面で悩みを抱えていたということです。

また、自死する前に相談した人の割合は、無職者の84.94%に対して、自営業者(起業した人および事業を継承した人)は63.3%、学生は57.8%に留まっていました。

この悩みから実際に死に至る期間がある程度あるということは、この期間中に私たちが「黄信号」に気付くことで、自死を減らせる可能性があります。

「あなたが死んだら私は悲しい」。その思いが伝わればと思います。そうしたら、寄り添うことも、話を聞くことも、語りあうことも、そして相談窓口を利用できるようにもなるかもしれません。

## 新しい死

ところで、自死はその背負っている社会的背景が時代や社会によって異なっていることがあっても、いつも私たちが直面してきた死であったといえます。一方で、技術などの進展によって新たな死について現代では考えなくてはなりません。たとえば「脳死」という考え方です。さらに人間の尊厳という視点から「安楽死」「尊厳死」ということも議論されています。ちなみに、ダライ・ラマ14世は、脳死や人工中絶について「仏教の身体観からみた脳死・臓器移植と堕胎」として言及していますので、紹介しておきます。ただし、これは仏教一般の見解というわけではありません。

死は密教の修行をしたことがある人とそうでない人との間では持つ意味が異なります。一般的に言って、脳の機能がとまっているなら、意識はもはや機能していないのではないのでしょうか。大切なのは意識があるかないかなのです。たとえば、脳死(…)脳の機能がまだ生きており、肉体が腐り始めていないなら、このような身体にもまだ意識があるなら、私たちはそのものがまだ生きた人間であると考えます。(…)例外的な状況があるかもしれませんが、一般にはその人が死ぬべきときに死なせてあげることがよいでしょう。(…)人間の生死に臨む新たな態度として臓器移植も挙げられます。(…)一般的に言えば、臓器を他人に提供することは「解脱」や「仏陀の境地」を得ることに寄与する要因です。その人は他のものを救おうという純粋な動機によって臓器を提供しているからです。(…)堕胎の可否はそれぞれの場合によります。(…)しかし、一般には堕胎は命を奪うこととなりますので、適切な処置ではないでしょう。もっとも重要なことは動機が良いか悪いかかなのです。(ダライ・ラマ14世、石濱裕美子訳『ダライ・ラマの仏教入門 心は死を超えて存続する』光文社、2000年、181~185頁)。